

# 発達心理学における「構成概念の措定のゆらぎ」 あるいは「観察可能な現象の絶対視」

—— 質的研究は発達心理学になにをもたらすのか ——

企画・司会・指定討論	本山方子	(奈良女子大学)
企画・話題提供	上淵 寿	(東京学芸大学)
話題提供	小松孝至	(大阪教育大学)
話題提供	松本光太郎	(茨城大学)
指定討論	東村知子	(奈良文化女子短期大学)

## ■企画趣旨

心理学は構成概念を措定することで、観察可能な現象を説明する心的メカニズムを解明しようとしてきた。同時に、構成概念の妥当性を、観察可能な現象や行動に還元させたり、構成概念によって別の観察可能な現象を説明しようとしたりしてきた。これは、構成概念と観察可能な現象との弁証法的なアプローチであるともいえるが、別の見方をすれば、構成概念は不可視性や非実在性を前提としているにもかかわらず、行為者や当事者の観念の実在性や素朴な直観から逃れることができない。

このことは、発達心理学の質的研究において、次のような問題を引き起こしうる。一つには、現象の説明の次元にとどまり、厳密な意味での原因論的解明を相当困難にする。二つには、創出された構成概念が現象の説明になじむほど、実在性が高まりうる。となると、研究営為としては、構成概念の措定自体を放棄し、現象の記述と解釈に終始し執着するか、あるいは、構成概念の措定に忠実であろうとして、観察可能な現象を絶対視するか、どちらかに振られる可能性がある。このことは、発達研究として致命的な問題であるのか、それとも、いわゆる心理学が内包する問題を暴くことになるのか。本企画では、話題提供者に具体例を提示していただきつつ、この問題を検討する。

## ■話題提供

### 記述と解釈と構成と人

上淵 寿

構成概念は、顕在的・観測可能なモノゴトに支えられている、潜在的・観測不可能というモノゴトである。ゆえに、単純に記述・解釈・構成の関係は、相互排反なカテゴリーとして切り分けられない。記述や解釈は記述する存在、解釈の存在を前提としなければならず、構成には記述・解釈をさらに記述・解釈する存在が必然的に関わる。つまり、記述や解釈をする人、構成概念を生成しそれを使用する人があって始めて存在自体が理解出来る。だが、その存在が記述や解釈や構成を施す人自体の立ち位置(モノゴト)を存在そのものを位置づけるのだ。ゆえに、問題は解釈学循環(Dilthey, 1990)的な性質を帯びている。本発表では、感情や動機づけの研究を具体的に検討して人の存在と循環の問題に迫りたい。

### 構成概念の措定・現象の記述と研究者の位置どり

小松孝至

概念を用いずに心理学的な考察をすることは難しく、現象の記述がない考察はその内容が限られたものになるだろう。重要なのは、これらのことがらについて、単一のあるべき姿を模索することではなく、個々の研究者が、自らの用いる概念や記述のツールが何を明らかにし、どこに弱みを持つのか、さらにはそれを用いる自分がいったい何者なのかを明らかにすることにもっと自覚的であるべきことではないだろうか。本発表は、量的研究・質的研究のいくつかの手法が、翻ってそれを用いる研究者のどのような立ち位置を明らかにするのかを考察した上で、「量的研究の脱量化 (Valsiner, 2006)」の考え方などを参照しつつ、質的研究の貢献の可能性を論じる。

### 言葉の形成・崩壊史から学ぶ構成概念の功罪

松本 光太郎

発達心理学における構成概念を思い浮かべると枚挙に暇がない。「心」や「発達」も構成概念と言える。言語学や哲学では、私たち人は言葉によって認識が可能になると言われる。心は「心」という言葉があって認識することが可能になるとされる。発達心理学では、ピアジェをはじめ具体的現象の検討を通して構成概念を世に提示してきた。日常語とは異なる言葉である構成概念が顕微鏡のような役割を果たして、身の周りにある現象の意味認識が新たに可能になった。それでは、構成概念づくりが発達心理学における質的研究の目的なのだろうか。言葉は人をたぶらかす。個体発生における言葉の形成・崩壊史を探究する発達心理学に学ぶことから話題提供を行いたい。